

ただうたうもののために

ぼくはあの遙かな雲のかなたからやってきたもの
みなもとを探すために川におりた
そこで遠くにある囁きを聞く
やさしい眩きを聞く
青春の観念の軌跡が風景の奥に消える
不安の時間
ぼくはあたたかい匂いにふれる

ぼくはいまわしい追憶をのがれるために
ひふが梢のイメージに触れる
日々が日常と和解する森を歩く
目のない魚が流すあおいろの血
都市の舗道の足跡の痛み
硝子の堅い断ちあとが放つ鋭い白い光
ぼくは生きるかたちにふれる

ぼくは深緑のはげしい匂いをのがれるために
赤い結晶の砂粒のなか
砕かれた記憶の破片を拾う
てのひらが水の意志にあたる
かたい感覚は都市のイメージを溢れだす
そして日差しにつらぬかれ愛を呼びもどす
ぼくは世界のかたちにふれる

ぼくはさわやかな記憶を想起するために川におりた

透けた遠い空の
空気が凍てつき結晶しているところに
とじこめてあったエメラルド色のガラス細工
そして鋭い切っ先にぼくの指が傷ついたとき
川底をさぐる日常の重さの
ぼくは知のかたちにふれる

ぼくは世界の中核にあるものをもとめるために川におりた
記憶のまへに佇み遙かな声を聞く
やわらかい松葉の針
瞳孔に突き刺さる意志
あこやがいが真珠をいだくときに流す色
若い雄鹿の知の澄んだ眼の光
そして陽がほほ笑み流す風景は

〈川底でひろった赤い結晶の奥で
やさしい幽かな響きが揺れ
かって愛したイメージが鮮やかに濡れる〉

そして夕暮れがひろげる
風景を愛する
色彩を愛する
稜線を愛する
人々の歩くビルディングを 街角を 舗道を 愛する
そのとき
ぼくは風にはこばれてくる花粉に噎せた
ぼくは蝶のおとした鱗粉に咽せた
そして
あの遙かな雲のかなたからやってきたものを探すために川におりた



佐山広平

さやま こうへい

昭和二十四年に新制中学校を卒業した後、菓子問屋の小僧、手作り鮎の職人見習い、印刷工の職を転々とする。その間に愛知県立瑞陵高等学校定時制に入学し、卒業する。後国立愛知学芸大学に入学し、卒業。
受賞歴 「文芸思潮」現代詩部門。優秀賞・現代詩賞・奨励賞。
羽生市主催「ふるさとの詩」佳作入賞。
白山市主催 千代女全国俳句大会 「つるべ賞」受賞。
○「名古屋文学」同人。「宇宙詩人」同人。
○ 詩集「散乱する実在に」・小説「華やいだ虚無を求めて」(自費出版)



受賞の言葉 佐山広平

九月十六日(火曜日)の夜、「文芸思潮」の五十嵐勉さんから優秀賞受賞のお電話をいただき、喜びはありながら僕はあはれ気恥ずかしさに襲われつづけた。

それは僕自身、己れを社会の事象や時代の事象に、また生の事象に投与する僕自身の軌跡を言語化せねばならないと思っているのにもかわらず、そして今僕の書く「詩」が最近また古くさいリフレインに寄りかかった抒情的な作品になっていること弱さそのものを知りながら、僕の指向する詩、思想的に、また知と感性を深めた詩作品として書いていないことの恥ずかしさであった。

受賞の喜びを噛みしめながら、今はただ指向する詩への言語に依る構築に賭けねばならないと思いつづけている。

世界からきえたい消えたい、と
曇り空から
涙になってゆくおまえたちを
たべる

とても不味い悲しみには
どうしても慰めの砂糖が要った冬の日
妖精がみな灰になったのは
誰のせいだか
判る子はいるか？

絶望の夜をつくるのは太陽かこの星か
手のとどかないものを睨めども
憎めども
敵に生かされることにはわりはなく
おまえたちは玩弄され
抜け出せもせずに消滅を願う
苦しむ魂は彷徨うように
生きながら
巡る

のどは始終激しい懺悔に灼かれ
歌わせても貰えぬ
いくら脚をさまよわせても
一向に花の種には至れず
もぐらの鼻先すら見えず

苦しい醜い俺の首を
折らず潤すのはおまえたち

たすけて
と
叫べなくなった
聖者
死なせて
と
叫ばずして生きてゆけない
美しい者たち

俺ののどを通り
暗い土にねむるならまだしも
再た化けて
ひかりに召される
浄き采女は枕も持たず

枯れたい潤れたいのだ、と
永劫しとどに滅果実らし
五臓厚みゆく
樵待ち万年

おれは
木屑か

屑だ

雪兄樹の無力

斎庭京吉

第4回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞



ゆにわ きょういち

1987年6月生まれ。
尊敬している詩人は宝野ア
リカ・佳宵布由。

受賞の言葉 斎庭京吉

前回に続きまして栄誉ある賞を頂き、大変光栄です。
「雪兄樹の無力」は、前回頂いたアドバイスを元に、自
分の体験を軸にして書いた作品です。率直に書いてしまうと、
込めたいものが生々しさに負けてしまうため、架空の樹に

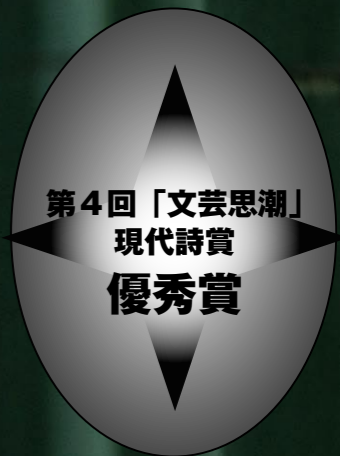
後悔を託してみました。彼はその意味で愛おしい存在
になりましたし、読み手のかたの心次第で色々な感情を背
負えるものであってくれると良いと思います。

対して「花蝶ノ行軍」には、特にコンセプト・主張はあ
りません。あえて全体に意味を通さず、筋を抜き、言葉の
連なりで絵を描くことを目標にしてみました。

「美しさなき誰かの撮影」は、雑談の中で弟が「俺だっ
て見えない所で苦労してるんだよ」とぼやいたのを受けて、
私の周りの人達はどうかやってみても立っていられるんだ
ろう、という疑問が頭に浮かんだことと、昼夜太陽にさら
されている地球はまるでフラッシュをたかっている被写体
のようだと思っただけの種とします。例えどんな過酷な
環境におかれたとしても、人がさいごに求めるのは結局人
で、その姿は美しさを掴もうとするカメラマンに似ていて、
また星の外側からもう一人それを撮影している巨大なカメ
ラマンがいる……という、自分でも少し混乱するようなイ
マジネーションを込めました。

当たり前といえば当たり前ですが、この世界ではものが
動くときには必ず力学的エネルギーが作用しています。で
は人の心が動くときはどうかといえば、きれいな目の出の
ような自然現象のこともあれば、たった一言の挨拶である
こともあります。

唯一、すべての物事から自身を脈打たせられる可能性を
持った、心というものにアプローチする手段としての詩に
関して学びたいことがまだまだ沢山あります。
技術的にも精神的にもまだまだ未熟ではありますが、この
たび頂いた優秀賞を励みに、これからもまい進していきたい
と思います。



なかしま まゆこ
 1987年6月6日生まれ。
 千葉県出身。
 現在、早稲田大学に在学中。
 所属同人誌等なし。

中島真悠子

包丁の角をつきたてて
 ぐるりとねじこみ えぐる
 台所の隅に置かれてあったじゃがいもは
 いつのまにか芽を伸ばしていた
 毒を含むそこ
 新しい生 は
 朝の台所で
 儀式のように
 正しく切り取られていく
 ざらつく表皮
 歪みくぼんだ塊
 内からあふれだした芽
 そのように
 私という塊にも

台所

姉の腕が
 母の舌が
 出てくる出てくる
 目が髪が歯が
 背から肩から頬から
 歳月をかけて
 かすかに毒を含んで
 いったったか
 伸びすぎた芽をあきらめて
 そこからもう一度育てよう

受賞の言葉

中島真悠子

小さいときから本を読まず、中学高校時代には図書館好きの、しかし本を読まないおかしな少女になっていました。というのも、本の装丁を眺めるのは好きなのに、いざ読もうと手を触れるとたちまち動悸がしてしまうからです。そんななかで読むことができたのは主に詩や短歌といったものですが、おそらくそれは読むのに小説ほど長い時間がかからないこと、あるいは当時の私の頭では読んでよく意味がわからないことが幸いしたのでしよう。今となっては自分でも不思議に思いますが、その頃が一番言葉というものを純粋

庭に埋めたじゃがいもに思いを馳せると
 とたん湿った暗闇の中
 丸くうずくまって眠る私
 髪は伸びていく根となっていく そして
 この家を支える
 家からはいつもかすかに人の声がするから
 聞きながら不思議な夢を見ている

…… 水、の音……

(消えた星々が渦をつくる)

(私は澄んだ卵を抱いて)

いつも迷っていた

(たぐさんの粒が)

起きるのか 起きないのか

(爆ぜては消え……)

遠く鳴り響いている目覚まし時計

(……)

やがて

姉のめが土中から這いだし空を見据える

母のはが風に揺れる

私は私に似た誰か

わたしになってゆく

私は待っている

掘り起こしてくれるやさしい手

誰かが霜をふみしだしている

目覚めはじめた朝のあいさつ

に楽しんでいたような気がします。
 そうしていつのまにか自分でも詩を書くようになって、ある時は言葉から見捨てられてしまったような絶望感を、ある時は言葉と懐かしい友人と旅に出るのに似た穏やかな高揚を覚えたりしながら、細々と書き続けてきました。詩を書く上で、私は時に設定にフィクションを用いますが、詩に込める想いまでもを作ることは決してはいけないと戒めておきます。
 私は四人姉妹の末っ子として生まれ、今日までほとんど「女たちの家」と言っている環境で生きてきました。関係はいたって良好ですが、母娘・姉妹というのは根強い不可思議な愛憎でつながっているようにも思え、また説明しがたい深い縁を感じます。
 今回の詩も、稚拙ながらそのような実感を込めたつもりでしたので、選んでいただけたことに何やら救われたような思いです。本当にありがとうございます。

すると皮を剥けばこんなにも

おいしく肥えた内実だと

子宮のようにたつぷりと水を張ったボールに

ごろりと沈めれば

静かにぬくい朝の明るい台所

優秀賞



きのした かなで

1983年生
オフィシャルサイト
<http://knst.xxxxxxxx.jp/>

2007年6月頃から詩作を開始。
2008年1月に新宿眼科画廊にて詩と写真のコラボイベントを開催。
第一詩集
「Unhappy Kingdom」(私家版)
第二詩集
「overturn boat whirl pool」(太陽書房)

第4回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞

Lazy

木下 奏

発光するペット、((五万回かき鳴らした日常の最中))
沸騰するカップラーメン、((誕生日祝いを百回繰り返すような脳味噌))
間に何もなければ、((快樂のともだちを今から呼んでくる仕草))
ただ私の毎日は容易い、((赤ん坊の如く嘆けば良いのだから))
いつだったか渋谷のレコードショップで、((アナタはシーフードアレルギーだ))
トマトスパゲッティーを頬張ることを、((受信していたのは悪夢で))
ただひたすらに望んでいたことは、((おめでとう、あなたのかのじょ))
都会の真ん中で、((おめでとう、あなたのかのじょになれなかったわたし))
ぬくもりを欲することと、((おめでとう、わたしのかれしになれなかったあなた))
似通った意味を持つ、((発信していたのは希望とそれから))
ああああああああああ、((こうしてたまに発狂するのだから正常だ))
いいいいいいいいいい、((インドのカレーが辛いぐらい当たり前だ))
あいしていいいいいます、((冷蔵庫にまだカステラは入っていたかしら))
mmmmmmmmmm、((ペンとノートを持って旅に出よう))
薄くなぞった紙の裏側に答えよ、((缶詰にはみかんジュースを))
おまえが本当に愛するものは誰か、((着色料は使わないでダーリン))
おまえが本当に愛するものは、((きらめく星空のファンタジー))
ソマリアを飼っているのは知っている、((リアルに好きと言えたら))
おまえの最愛の猫は、((醤油にバターは意外に良い組み合わせだな))
おまえが愛する猫は、((みりんにしょうがはいたってふつうである))
おまえの中の猫は、((生クリームに黒糖は信じられない))
おまえが好きで、((コンデンスミルクに豆乳なんてバカかと))
おまえが好きで、((でもキミが旨いというなら旨いのだろう))
おまえが好きで、((空白を埋めるように甘いものを欲して))
たまらなく、((緊張のあとに訪れる快樂を欲して))
すきで、((まともに暮らすには到底及ばない速度で))
すき、((朝十一時現在世の中に適応できていなくて))
か ((カステラのひとつが己の分身になってくれていたと知る))

受賞の言葉

木下 奏

この度は、すてきな賞をいただきありがとうございます。
詩というものを書き始めてから、まだ一年程しか経っていないので、正直驚きを隠せませんが、身に余る光栄として嬉しい気持ちで一杯です。

私にとって詩とは無限大に遊ぶことが出来る表現方法の一つだと感じています。
さらにテーマとして音を感じる詩を書いていたら、と常々思っています。
そして詩というものの持つリズムや、自由な形式での言葉遊びを、今後も自分なりに楽しんで追求していけたらと思っています。
改めまして、今回このような賞をいただけたことに感謝致します。
本当にありがとうございます。

かせ みなこ

1990年生まれ
高校三年生

かせみなこ

春陰

第4回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞

千円札についた染み
数えられるだけのしあわせだけ
思い返してい
る

しますか
きみを殺せたと
思う

しますか
思うさまきみを

せますか
殺せたと

すますか
殺せたのに
すました

信じています

こころのそこから

信じていました

います

あなたが

わたしを

信じて

いないのに

祖母の形見の化粧棚の三番目の引き出しの
ちりめんの小物入れの中のおしろい花の
種の植えた先のプランターの出ない芽の
落胆の捨てるべき先の化粧棚の4番目

きみがくれないポーチの中にマニキュア

飲み乾す

オーロラに輝くことばが喉に絡み付いて
何一つ言えないです

とうきょうとつ、きよ、きよ、きよ、かきよく

ねえきみを殺せるよ、台所のね、流しの下にね、包丁があつてね、
ねえだからわたしも殺せるんだよ知ってる？
東京特許許可局局長急遽特許許可却下

飲み下す！

どこかの哀れな少女の口から溢れ出る宝石の
輝きのしあわせの微塵も欲しくないのあなたの
手のひらのしわとしわを合わせてしわあせ、

どこかの哀れな少女の哀れな姉の口から溢れ出るかえるの
悪寒のふしあわせの微塵にいたるまで必要なわたしの
ことばの

残像

マニキュア
におう

ねえ、
殺せる

の
な

かま
って。

地球儀

机の上に 古びた地球儀がひとつ
少年は頬杖を突いて
地軸と同じ角度に首を傾げた

やたら勢いよく回転しているのは
誰の悪戯か
大陸はめまぐるしく昼夜を巡り
波立つ七〇パーセントの海に
島々は沈んでしまう
それならこの部屋も 机も何もかも
高速の遠心力に引っ張られて
今しも振り落とされそうになっているのは
間違いないのだ たぶん

生まれてこのかた ずっと
誰かの手が両足首を押さえてくれていて
宇宙空間へ放り出されることもなく
どうにかみんなと一緒に回ってきた
上へ下へと引っ張られ
人並みに身長も伸びてきた
けれど
自分ではない誰かを中心に回る世界は
向きも速さも減茶苦茶で
いいかげん 平衡を失い始めているのも

事実なのだ たぶん

少年は震える人差し指を
地球儀に近づけていった
最初に触れたのが
ヒマラヤ山脈だったか
サハラ砂漠だったか定かではない
滑らかな地表は
指紋の溝との間にわずかな摩擦熱を発生し
やがて回転をやめた

ふと気づけば
足を大地に繋いでいた手は
いつしか消えうせて跡形もない
人差し指は太平洋の片隅を
さし示したままだ

どうする
その指でついに
君が地球を回してみるか
それとも 解き放たれたその足で
床を蹴って
自ら回ってやるか

どちらでもいい
選んだ瞬間から
世界は君のために回り始める

第4回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞

二条千河



にじょう せんか

北海道札幌市出身。
2005年に詩集『赤壁が燃える日—現代詩「三国志」—』を上梓。
HP「二条河原の落書」
<http://www.h7.dion.ne.jp/~nijo/>にて、作品の公開や創作活動報告を行っている。

受賞の言葉 二条千河

今年の子年である。私はねずみ年生まれではないが、あの小ささと言いつつ、せわしなさといい、どうも他人事とは思われない。聞くところによれば、彼らは硬いものを齧らないでいると前歯が伸びすぎて餌を食べられなくなり、餓死してしまうらしい。ねずみのように丈夫な永久歯が生えるようにと抜けた乳歯を軒下へ投げる風習があるが、そんな宿命を背負うくらいなら、軟弱なヒトの歯で十分だという気もする。

本賞への応募は三度目になるが、ありがたいうちに毎回、誌上にて講評を頂いている。そのたびに、自分の作品は本当に「詩」なのだろうか、という根本的な疑問に立ち戻る。正直を言えば、詩でなくてもよい、と思う。ただ、何であれ書き続けていなければ、そうしてすり減らしていかなければ、私の牙はいつか私の口を塞いでしまうかも知れない。忌憚ないご感想、ご批判、すべての歯応えは生き延びるためのよすがとなる。こうして、またその機会を授かったことに、心より感謝申し上げます。

凧

空を見上げると
幾重にもかさなる光の層の中で
はためく凧

光る糸がぼくの手につたえる
はげしい気の奔流

よどみ

渦まき

せせらぎ

歌

ジェット機の翼が

空を豆腐のように切り裂いて

見えない青の中に

血がほとばしる

と見るまに

やさしい風がなだれこみ

傷を癒し

ゆらぎ

たゆたい

雲の繊維に

光が満ちかよう

はてしなくふりそそぐ

オーロラ

宇宙線

時に隕石

おわりのない天上大風に

深くつきささる

ぼくの

凧

長澤靖浩

第4回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞



受賞の言葉

長澤靖浩

ながさわ やすひろ

1960年 大阪府生まれ
1985年 大谷大学大学院 文学研究科 仏教学専攻 修士課程修了
1985年～大阪府公立学校教員
2004年 『魂の螺旋ダンス はるかなる今ここへ』 第三書館より上梓
2006年 『ええぞ、カルロス』 第8回 人権絵本原作コンクール優秀賞

死の扉の向こう側からでなければ観られないような光景を、詩に描いていきたい。生きている今ここで、言葉によるアートとして紡いでいこう。歓びも悲しみも愛も憎しみもぜんぶ感じ、すべて超越し、死から逆照射し、そのうえでもう一度、この生をあるがままに抱きしめたい。「日向の歌」では心身を爆破して空なるものの静けさへ旅した。「凧」でははるかなる天空と今ここを一本の糸でつなぎ、その手ごたえをびんびん感じた。そして「カレイドスコープ」では色即是空の合わせ鏡がめくるめく光の乱射となりダンスを始めた。かな?(笑) さあ、みんな、もっともっと一緒に踊ろう。この世は光の回り舞台……。